



水俣病資料館に行ってみて！！

作成者：薬学科 1年 坂田、篠原、寺田

概要

09年1月20日(火)に矢原先生と白崎先生引率のもと水俣病資料館に行ってきました。水俣病の歴史を知り、それを現在にどう活かすかを学んでくるのが目的でした。

水俣病について

水俣病は昭和31年(1956年)5月1日に病気の発生が公式に確認されました。水俣病とは工場から環境中に排出されたメチル水銀化合物が魚などに蓄積され、この汚染された魚を食べることによって起きる中毒性の神経系の病気です。また、妊娠中の母親が汚染された魚などを食べることによって、胎盤を経由して胎児がメチル水銀中毒になり、脳性小児麻痺に似た障害をもって生まれる胎児性水俣病があります。空気や食物を通じてうつる伝染病ではなく遺伝することもあります。

水俣病の主な症状

手足の感覚障害、運動失調(秩序だった手足の運動ができない)、求心性視野狭窄(視野が狭くなる)、聴力障害、平衡機能障害、言語障害、振戦(手足の震え)、など



水俣病の年表

1908年 日本窒素肥料株式会社が水俣に工場をたてる。
1932年 テッソが水俣病の原因物質のメチル水銀を水俣湾に流し始める。
1956年 水俣病公式確認日(5月1日)
1959年 水俣湾の魚を食べることでおこる病気で魚を汚染している物質は水銀ではないかと発表。
1968年 水俣病はテッソ工場の廃水が原因で起きた公害病であると政府が断定。
1969年 水俣病第一次訴訟が始まる

1973年 水俣病第二次訴訟が始まる。
1974年 水俣湾仕切り網の設置。
1977年 水俣湾公害防止事業が始まる。
1980年 水俣病第三次訴訟が始まる。
1990年 水俣湾埋立地「エコパーク水俣」が完成する。
1992年 水俣市が環境モデル都市づくりを宣言。
1993年 市民によるごみの分別が始まる。
2004年 最高裁判所が国と熊本県にも水俣病の責任があることを認めた。

～感想～

急速な経済発展の裏でこんなにも周辺市民が苦しんでいるのを見て見ぬふりをした国の責任は大変重いものだと思います。しかし、このような水俣病の経験は実際に現在の世界においても通じるものがあると思いました。石油エネルギーの大量消費と生じて出てくるゴミの山、資源の消費とそれから生じるゴミや有害物質は、消費した大国ではなくその周辺に存在する弱国を犠牲にしています。このような理不尽さを私たちは変えていかなければならないと強く感じさせられました。

ちゃんと知るということがいかに大切か気づくことができました。最近の自分を振り返ってみて、ニュースなども見出しただけ見て満足したりしていました。でもそれでは知ったことにならないと思います。ちゃんと知るということは薬剤師にとってもすごく大切なことだと思うので、これからは一つ一つのことに対して深い知識を持つように心がけたいと思いました。

今回大学生という立場で、水俣病を学んだが、改めて水俣病の恐ろしさを学んだと同時に水俣病の教訓を生かし未来に進むことの大切さ、素晴らしさを学ぶことができました。今後研究職を目指す立場として新薬の開発に携わっていくに当たって環境に配慮した研究活動を行っていくだけでなく、他の発展途上国様な国々へ水俣病のような悲劇を起こさない活動を取り組めるような研究者を目指していきたい。

特に印象に残ったこととして、前進するためには過去を振り返らねばならないというフレーズがあった。これは水俣病を引き起こしてしまったことを後悔、反省するだけでなく未来にその経験を生かしていこうという意味である。これは水俣病だけでなくすべてのことに当てはまることだ。今、研究室に配属され研究を進めているが、ネガティブデータをしっかり受け止め研究していくことが成功につながると思う。

水俣病の患者さん達は不当な差別を受けてきたのだらうなという漠然としたイメージしか最近まで持っていませんでした。今回の見学では、水俣病に巻き込まれた人々の目線から見た資料にも数多く触れることができ、自分が今まで想像していた以上に、患者さん達は周囲から拒絶されていたとわかり衝撃を受けました。

日本は大量生産、大量消費の社会で無駄の多い社会です。今こそ、水俣で見られた環境破壊からの公害病の発生という負の連鎖が身近なところまで来ているということを一人一人が自覚しなければいけないのです。また資料館で学んでいく中で特に強く感じたのは水俣に住む人たちの心です。水俣病の発生にも負けず、周囲からの差別にも臆することなく、水俣を愛し、問題の解決に真剣に取り組んだからこそ今の笑顔が見られるんだということを痛感しました。

第二、第三の水俣病を世界の中で作らないようにするためにも日本がきちんと水俣病についての問題を解決し、この水俣病を風化させることなく、日本の公害の原点といわれる水俣病の貴重な資料を収集、保存し後世に水俣病の教訓と経験を伝えなくてはなりません。

発祥当時、今のように科学も進んでおらず、奇病、伝染病と言われ、周りからは差別の対象となり、国や工場から見捨てられていた厳しい条件下にもかかわらず患者の皆さんは必死に、かつ前向きに生きておられたんだというのを強く感じました。また、水俣病は負の遺産かもしれないがそれを悔いてばかりはいられない、この負の経験を生かして未来へつなげていこうとする水俣全体の前向きな考え方は自分自身に対する教訓にもなりました。

私たちにできることは水俣病について詳しく語り継いでいくことだと思う。また科学を学んでいるものとしてはその便利さの裏には危険なこともあるということを常に認識し、自然環境を守るために小さなことでも意識して行動することが大事だと思う。

ひどい環境汚染、事実の隠ぺい、責任逃れなど人間の腹黒さが感じられた。企業の利益のために周辺住民の命を軽く見ている姿勢が信じられなかった。だが、仮に自分が企業側の人間だとしたら、同じようなことを絶対しないとは言い切れないと思った。

展示してあった写真や行きのバスの中で見たビデオで初めて水俣病患者の方を見たのですが、教科書の活字だけではとても想像できない目を覆いたくなるような状況が実際にこの土地で起こった現実なのだと信じられませんでした。

将来医療人になる立場として、予防医療の在り方、障害者に対する薬剤師の役割なども考える機会を与えられました。

水俣病は人が豊かさを求め、人の命や環境を軽視したことによる公害であり、防ぐことができた悲劇であるということを忘れずにいたいです。

今回の水俣での研修を通して、知らないということ、そして知らないふりをすることの恐ろしさを感じ、相手を思いやることの大切さを思い知った。

水俣は四大公害病の一つである水俣病の発生地であるので教科書や本、テレビなどで少なからず誰もが知っています。しかし、曖昧にしか知らないことは逆に偏見や差別を生むこともあると思います。

最も印象的であったのは、水俣病患者である少女の写真です。6歳で発症し意識を失いながらも20歳すぎまで生きていた少女の澄んだ瞳の写真に幼い命の可能性まで奪っていった恐ろしい公害が二度と起こらないように、全世界が努力していくべきだな、と思いました。

薬学を学んでいる私たちは科学の発展は人のために行うべきであり、利益を追求するためだけに行うものではないということを念頭において、これからの世の中を生きていくべきだと考えさせられました。